

2024年2月

課題本 『小説伊勢物語 業平』

高樹のぶ子/著

日経BP・日本経済新聞出版本部

2020年

2024年2月 竹原読書会『小説 伊勢物語 業平』

吉川五百枝

高校までの国語授業で、日本の古典としていくつかの作品に出会ったが、どう鼻屑目に考えても面白いとは言えなかった。古典文学は、まさに受験対策でしかなかったのだ。

教科書で読む古典作品は切れ切れで、浮名を流すイケメンか、嫉妬心の強い女か、来ぬ相手をひたすら待つ女か、何をして暮らしているのか解らぬ貴族など、人物の魅力など解らぬまま、出題されそうな部分の受験勉強をした。そんな味気ない出会いのせいで、古典作品を何十年かは敬って遠ざけてきた。

しかし、出会わせてくださる人によると、古典が生き生きとしてくる。遠距離通学ものかは、テストも宿題もない古典の受講生を喜喜(奇々か?)として数年続けてきた。敬遠してきたと言っても、あてにはならぬものである。

古典との出会いは授業者によるだけではない。現代作家の筆による出会いもある。

『小説 伊勢物語 業平』は、注釈付きの古典とは趣が違う。題名の示すように、主人公を在原業平と見立てて、その生涯を、高樹のぶ子が小説仕立てにしたものだから、忠実な現代語訳ではないのだ。

歴史的事実として資料のある和歌も、小説の中では、その時々状況や情念を描写するものとして取り込まれている。何より、登場人物は事実かどうかには頓着せず、高樹のぶ子が創り上げた造形物なのだ。平安時代初期に生まれたとされる『伊勢物語』という歌物語を借りてきて、作者がしっかり惚れ込んだと解る男を自由に泳ぎ回らせる。もちろん、古典の様式に外れたことは書かれないので、この物語の成立事情や、描かれる有職故実、年譜、系譜、地図など、レクチャーのおかげで識ることの多さも少々ではない。

作家として、社会的善や悪などを越えた世界で、人間の情を底まで見つめて表現する高樹のぶ子らしい人作りがなされている。作家と一緒に業平の激情も悔恨も怖れも、隅々まで皺を伸ばしながら読み取って行けた。

高樹のぶ子といえば、恋愛小説の大家として名前が知れ渡っている。

恋愛小説ほど、人としての真髓をみせるものはないと私は思っている。社会のルールなど目もくれない。[正邪も白黒もなく、これほど曖昧でわりきれないものはありません。当人にとっても、よく解らないのが恋心というもの。]筆者がそう記すのは『恋と誠』(日経BP2020年)である。

男女の仲に、「みやび」という言葉を挟み込んで、ぬきさしならぬ人間関係から、ちょっとすき間を作っている。男女の仲を書き込んでも、息をもつかせぬ緊迫感ではなく、どこかに無常観のようなものがただよい、追い込まれる感じがしない。それが彼女の言う「みやび」というものの働きかもしれない。

高樹のぶ子の恋愛小説は、世のルールに当てはめようとする余裕など感じさせないで進んでいくことが多いが、この小説は、どこか違うのだ。だいたい、書いた小説に副読本のような『恋と誠』を付けて書いて居るのが高樹のぶ子らしくない。

歌物語として成立した原文を元にしてのだから、和歌の持つ言い残したような気分を消すわけには行かないという心理的事実を推測してみたくなる。

高樹のぶ子は、「みやび」について、唐木順三の〈一種のきよらかなあはれがある〉という記述を、卓見として引いている。[平安の「みやび」の本質であり、現代にも通じる「誠」の姿なのです]とまで言う。唐木順三が〈業平の心に戀わびはあっても、好色のすきはない。〉と言うからなのだ。〈西鶴の好色物の人物とはまるで違ふ〉と言われて、彼女は大いに頷いた。

高樹のぶ子の二者間の「恋、愛」には、時間という観念がないと私は思う。一瞬という時間観念もない。光と光が交差する。ただそれだけ。分析もない。すべての計測を無効にし解き放つ。光の交差した後の影響はもちろん時間や揺れなど様々なものが残るだろうし、その残響こそが生きる中身だということにはなるだろうが、その光と光の交差するただそれだけに迫ろうとして書き続けた人だと思ふ。

平安のプレイボーイ、恋のハンターと言われるのが業平の伝説的姿だが、それだけでは終わらない男を描きたかったに違いない。たくさんの恋愛小説を書いてきた高樹のぶ子が、ただ男女の好色に終始するのではなく、様々な事情を展開していても、底には「光の交差」を外さないで書くのが彼女の魅力だ。だから、私も彼女の恋愛小説は別格だと思っていくつも読んだ。

『伊勢物語』に書かれた男が在原業平のことだという説は成り立たない。業平がモデルだったかもしれないが、今に伝わる藤原定家の底本も、この物語が100年読み継がれている間に元の姿が見えなくなっていると示している。

この作品の感想文を書くのは3年ぶり、2021年に他の読書会の文集に書いた。それを参考にしようかと思ったが、その時、その時が、自分の生きている証だと思ってまた書き起こすことにした。

3年経っても私の中で生き続けているのは、藤原高子と恬子内親王である。

好奇心旺盛、高い身分にあって教養に富み、性的にも魅力あふれる高子。業平が嵐の夜に連れ出すも成就せず、やがて国母となった女人。後に、歌人業平を擁護するのも、小説の膨らませ方として納得する。

恬子内親王は、男性の権力闘争に負けた側の内親王で、兄の惟喬親王共々、皇嗣の道から外れた貴族のはかなげな様子をみせる。その中で、恬子内親王は16才で斎王となり伊勢に赴く。斎王は、高貴な身分ではあっても生涯独身と定められ、天皇の代替わりまで都に戻ることは叶わない、恋などもってのほかのことである。20才。その斎王が伊勢に来ていた業平と「またあふさかの関は越えなん」の関を越えた。斎宮には許されぬ妊娠。生まれた赤子は、他家に養子に出るのだが、斎院お付きの伊勢の方に抱かれて業平に会いに来る。高樹の

ぶ子は、齋院の意志の強さとして受け止めている。天皇の生母となった高子にしても、齋院となった恬子内親王にしても、その時代が制約の多いものであっても、その中で自分の意思で抗い従容として生きている。

女性の健気さが残り香となる「小説」というジャンルの幅広さと凄みだ。
結局、私の中では、分化不能な高樹のぶ子賛歌が残っていくだろう。

『小説伊勢物語 業平』を読んで

◆ 【 TK 】

またまた苦手な時代物。

現代語訳でもわからない。

こんなとき 読書会で話を聞く良い機会となります。

文法、和歌、時代背景全てがわからなければ楽しむことができないからです

この本の作者高樹さんは他の参考本も書いているのでそれを読みました。

雅とは宮廷とか都に対するあこがれという解釈もありますが、わからないことを無理にわかろうとしたりすることなくそのままを我慢してみる意味もあるという高樹さんの見解。

大河ドラマの紫式部も話題がのぼり、時代背景が少しだけわかりました。天皇支配とかもそうです。階級、結婚の制度しきたりが少しわかりました。

それにしても当時の和歌は今のミュージシャン、エンターテインメント、文化だったのです。そして自己表現、恋文。その時代の心がうかがえる文学と言えるでしょう。

◆ 【 JM 】

和歌と1.2行の地の文からなる「伊勢物語」を、業平を主人公に時系列を整えて一代記に仕立てた作者の手腕は見事である。ゆったりとした丁寧な語り口調の文体は、読み手を平安時代の雅な世界にいざなってくれる。

「NHK100分de名著『伊勢物語』を読むと「はじめに」で、作者自身が「小説にするにあたっては『文体をつくるのに大変苦労しました。遂語訳的に内容を現代語に移すのではなく、その時代のおいや実感をよみがえらせ、みやびを表現しつつ、小説として緩まないものにするためにはどうすればよいか』と書いている。作者の思い、意図は成功していると思う。

本作品を読んでいると、初めは業平が軽佻浮薄に思え「何やってんだ」とあきれていたが、読み進めていくうちに、自分に正直で周りを幸せにする人ではないかと思えてきた。この時代と現代は常識も習慣も全く違うだろうが、人間の本性、喜び、哀しみは変わらないのではないかと思う。自分の思いを大切に生きた業平の人生は幸せであったらう。

「つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」の心境に近い年齢となったが、自分らしく生き、最後を迎える時微笑みながら逝くことができたらいいなと思う。きっと業平は微笑みながら逝ったに違いない。

◆【 KH 】

古典『伊勢物語』といえば、平安時代の有名な歌物語。歌人、在原業平の歌 例えば 世の中に たえて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし は、せば～ましの反実仮想、と文学史と古文文法のささやかな知識は浮かぶけれど、この分厚い小説を読破できるのか、大いに不安だった。

無知な私が、まず驚いたのは、業平さんのモテモテぶり というか女好きなところ。こりゃ光源氏の上に行くではないか！しかも光源氏は架空の人物。一方業平さんは、実在。脚色されているにしてもかなりの人物であったのだろう と思いつつ読み進めた。(光源氏のモデル説もあると、この度初めて知った)

あまたの女性遍歴の中でも、やはり一番は高子姫との恋・歌のやりとりだった。空の高みで刻々と姿をかえる月のごとく、高子姫はその容姿と、何よりも秀逸な返しの歌で、業平殿を魅了してやまない。当意即妙。平安人の言葉のセンスに惚れ惚れしながら、気がつく物語を読了していた。

かつて、古典作品をあまりに知らない私は、これではいけないと『徒然草』現代語訳本を手にとったことがある。結果は、「つれづれなるままに ひくらしすずりにむかひて 心にうつりゆくよしなしごとを〜」という流れるような名文とは全く別物の現代語訳文にげんなりして、面白くもなんともないことがわかった。やはり、意味が全てわからなくても、この文体だからその魅力があるということ。そういえば、伊勢物語は歌物語。和歌は、当然古語であるのに、地の文は高樹のぶ子さんの練りに練られた文章で、この上なく自然に物語に没頭できるよう綴られていることに、読み終わってから気づいた。文体に苦心したとご本人がおっしゃっていることは、承知の上で読み進めたのに、話の中味に魅せられ、文体云々を忘れさせるのぶ子さまに、心から拍手を送りたい。私は迂闊な読者だから。

漢詩、漢語が主流、もちろん男性が主流の世の中であって。これからの世は“和歌の時代”その時代を、文化を共に牽引してまいりましょうとの、高子妃から業平へのメッセージ。それは、古典作品『伊勢物語』を見事に綴り直し、現代の我々を魅せてくださった高樹のぶ子さんが描きたかった高子妃と業平像だと感じられる。伊勢の斎王 恬子様の気高さ、凛々しさ潔さも。高樹さんの筆の力は凄い。

いつも軽い感想文で申し訳ないが、「水無瀬」そういえば、阪急京都線の、普通電車しか止まらない「水無瀬駅」ってこの水無瀬？？と思いきりあたり路線図を調べてみてびっくり。そうなんだ！また、無知を晒してお恥ずかしいけれど、大昔、何も知らずに通過してた水無瀬で、あの反実仮想の歌が読まれたのか。業平と惟喬親王が鷹狩りに興じていた地だったとは、と思った途端に、とても雅な気持ちになった。

◆【 望月悦子 】

今回の感想文は2021年3月11日に作成したものを引用することにしました。3年前はまだ精力があったようで若かったんだなあと驚きました。

日常の慌ただしい生活の中でこの本を読んでいたのですが、どうも内容のテンポにスイッ

チを切り替えられず、開いては綴じるを繰り返す進み具合でした。

仕事が一段落ついた時、はたとミヒヤエル・エンデの「モモ」が頭をよぎりました。なんてこっちゃあ今の自分は、時間泥棒に振り舞わされている生活ではないかと。

再度ゆっくり読み進むうちに、この本と並行しながら原本伊勢物語(川上弘美訳)を読みました。一段の「男がいた」から始まり、百二十五段の内「高貴な男」「身分のある男」等主人公が「男」、「女」「帝」「男と女」等と三人称で各段の冒頭に主人公が明記され「色ごのみでもあり、また同時にものごとの理もわきまえた男だった」と簡潔な短文で分かりやすい。各段には和歌と生活の様子が一緒に興味深く展開されています。その中には、「つれない女に詠んでやった」とか「やはり自分のものにはできそうにない」「うらみごとを言ってくる女を呪わしく思い」「多情な女と深い仲になった」「どこかに、よき男はいないかしらん。そう思っていたけれど、口に出すことははばかれた」「奥ゆかしいと思っていた高安の女の、だらしがない姿を見てしまった。つかえている者の給仕を待つことも我慢できず、自分の手で直接しゃもじを持ち、飯を器に盛りつけているのである」「右の馬頭であった翁(業平のこと)は老いの目のためか・・・今になって味わってみれば、たいした歌ではない。当時はまさった歌として感じていられたのだ」等など、青春・壮年・老年のライフサイクルの中での愛・友情・旅の絶唱などに、当時の特に貴族のおんなたちは、興味津々羨望を持ちながら伊勢物語を語りあったことだろうと推察できます。

小説伊勢物語「業平」の文章の美しさに魅せられながら読み進み、平安時代の貴族の生活と「業平」の生き方を考えてみました。

高貴な血筋に生まれた業平は、「菓子の変」が無かったならばそのまま何代かの天皇になっていたかもしれない。数々の女性や男性と出会えて和歌を詠むことができたのだろうか。「人間万事塞翁が馬」ではないけれど、在原姓になれたからたっぷりの時間の中ゆったり過ごしながら、自分を見つめることができたのではないだろうか。

平安時代は、現代のように多様な物に囲まれず情報もあふれず、豊かなのは事象を含めた自然のみ。そんな自然の中で業平は、人々と共にのんびりゆったりと時には悔しく悔しいこともあるけれど、権力から外された宮廷人として自由を謳歌しながら生活できたのではないかと思います。とはいえ、「咲く花の下に隠る人を多み 在りしにまさる藤の陰かも」と藤原氏への複雑な嫌み混じりの和歌を詠んでいます。こんな和歌をさらりと詠み、葛藤しながらも自分の生き方を考えているのが素晴らしいし、業平の魅力の一つかもしれない。

平安貴族は通い婚が普通で、生まれた子は母親の家で母親の両親と一緒に生活しています。現在のような法的束縛がないから、慰謝料とかシングルマザーとか面倒な問題は考えなくてもよい文化のようです。

「一つには、有常邸において我が子にまみえたこと。思いもかけぬ成り行きでございました。さらには、まみえた所が、有常邸の崩れた廊であったことです。庭や池の手入れもおぼつかない様子に思え、存外に打ち侘びてお暮らしなのはと。有常殿にお会いできたなら、このような胸にかかる暗雲も、語り合いにより去るのでありましようが(P177)」

平安時代の男性は気楽で結構なことと思いつつも、孫を世話する時には若き頃の気楽さの代償とは憂えず、昔からそうだったと思っているのでしょうか。この時代のおおらかさなのか。業平は「胸にかかる暗雲も、語り合いにより」と思うところが、彼の優しさ、相手を思う心も

ちなのでしょうか。それとも当時の男性は皆そうであったのだろうか。

「君により思ひならひぬ世の中の 人はこれをや恋といふらむ」と有常殿に贈っていますが、おっと、ここで「恋」という言葉が出てくるの。現代人の自分には理解できません。返歌には「ならばねば世の人ごとになにをかも 恋とはいふと問いし我しも」と何を恋というのかと皮肉っているのではないかと読み解いてみましたが、有常殿同様自分も堅物なのだろうか。

「乳母子との髪の違いなどから、木切れを持つ子は、和琴の方の御子、すなわち業平の子では。業平、齢を数えます。三日夜の餅のときよりどれほどの年月が経ったこと。・・あれからの月日を思います(P175)」ある小児科医は「赤ちゃんと母親は肉体関係、父親とは信頼関係である」と言っています。いつの時代でも父親はその事実を信じるしかありません。業平も同じであることが窺え面白い。作者の文章表現が美しいからか、なんとまあ おおらかでのかなことよと思えます。

また、通い婚には夜明け前に帰るといふ付き合い方があるです。ということは暗闇の中での時間を過ごすこととなります。風流な灯台の薄明かりのもと、「白い爪の先が、わずかに覗き」とか「闇の中にぼくと浮かび上がる白い指と、その指を搔き抱いた手触り」「重ねた桂の色は見えませんが、桂ごとの香りは、前にも増して深く、ほかの女人には真似ることの出来ない気高さがございます」等等触感・香り・気配などの感性が通い婚で鋭敏に磨かれていくのでしょう。

「お返し文は、梅花の香を焚きしめた紙」「文は小さき棘のある梅枝に、柔らかく結ばれておりました」なんと奥ゆかしい心配り。世知辛い時代に生きている自分にはため息が出ます。一方、西洋の男性は「セレナーデ」等と言われる恋歌を相手の家の窓の下から、思いを伝えています。業平は築地の外で横笛を吹いて存在を伝えています。詠んだ歌の通りに、声をあげて泣いている高子姫の思いを汲んで、「近江の方は、手に持つ主人の歌を高子姫の櫛に結び、音たてず庭を走り、築地越しの笛の音に向かい、放り投げたのでございます」物静かな生活をしている女官とは思えぬ激しい行為に驚かされます。「小石のように業平の前に降り落ちてきて、それを拾い上げた時の喜びは、言葉にもならぬほど。業平は月影にかざして、歌を読みました」現在のようにネオンなど無駄な明りはなく、ただ月の光があるだけ。月光にかざして恋歌を読むなんてなんとロマンチックなこと。業平は、返歌を扇に書き築地越に投げ入れています。近江の方は、返歌を受け取ったとすぐさま合図として築地を打ち、それを受けて、了解したと業平は笛の音で返す。

セレナーデのように静かに愛情いっぱい歌って想いを伝える方法もあれば、平安貴族のように身近にある物を使って、熱情的に想いを伝える方法もあるんだと感心しました。同じ恋歌でも、平安貴族の方が率直で風流で本気である姿に感服するばかりで軍配をあげたくなりました。

原本の「伊勢物語」六十九段には「その夜は、一晚じゅう酒盛りだった。・・・女は盃をさしだした。盃の皿には、歌が書かれてあった。『かち人の渡れど濡れぬえにしあれば』・・・男は、たいまつ消炭を手にとった。つづきを、書きついでゆく。『またあふ坂の関は越えなむ』男はそう詠んで、尾張へとむかった。時は清和天皇のころ、斎宮は、文徳天皇の皇女であり、惟喬の親王の妹であった人である」この段は「小説伊勢物語 業平」の中の「夢うつつ」で描写されています。身分不相応な恋の苦しみをどう乗り越えるのか、わくわくはらはらしなが

ら想像力を掻き立てられます。

「塩竈・水無瀬」の章での、嵯峨帝第十二皇子の源融(源氏物語のモデルらしい)と業平の心の内が分かり合える会話と歌に気が留まりました。そこでの作者の意図する文章も心地よい。「今宵の私を知ることなく、あのように快樂に酔っておりますが、業平殿にのみ、語りたき心地でありました。今宵、この南庭を見ながら、荒野を語ることができるのは、業平殿のみ……」業平は「塩竈にいつか来にけむ朝風に 釣する舟はここに寄らなん」と詠んではいますが「融殿が塩竈をこの南庭に造られたのも、思いつきにてはございますまい。鄙の極み、貧しき海人の営みにこそ、時めく華やぎなどの為しえぬ、永久に心打つものありとの、深い真があると覚えます」融の横側を見ながら「贅を極め、興趣の頂に立たれた御方と申すより、この庭がやがて草の原となりはてた景色を見ておられるように、思えたのでございます」権力や財だけでは満たされない人としての心の内をお互いが分かち合っています。また、「鶯のこほれる涙」の章での二人の会話にも、「……政治の正しさが何かはわかりませぬが、私は歌に生きております。歌は叶わぬこと、為しえぬことも、詠み込むことが出来ます。命を超えて生き長らえるのも、歌でございます」「私(業平)は、飽かず哀し、の情を尊く存じます。叶わぬことへのひたすらな思いこそ、生在る限り、逃れること叶わぬ人の実情でありましょう……飽くほどに手に入れようとしたしましても、それは歌の心には叶いませぬ」「飽かず哀し……業平殿はまことに、強い方だ。十分でなきこと、足りぬことに耐えるお力がお有になる」「このような山里の、川に映る松陰を好まれる心ばえ、融殿はどうに流離のご境地におられます」歌を通して生きるの意味についてもお互い理解し合えることを喜んでいきます。ゆたかな財はあるけれど、権力争いの絶えない貴族社会の中で、自分の軸をずらすことなく生きている、もしくは生きようとしている源融も在原業平も、ただの好色だけではないということを作者はここでも強調しているように思えます。江戸時代の松尾芭蕉「夏草や 兵どもが 夢の跡」にも通じ、現代の田舎に移住する生活願望にも通じるように思えます。

原本の百二十四段「男がいた。思いのはてに、ふと、こんな歌を詠んだのだった。『思ふこと言はでぞただにやみぬべき我とひとしき人しなれば』心のうちに思うことは多いけれど心のうちは言わぬがいい 同じ心をもつ者などこの世にはいないのだから」一方、小説では「つひにゆく」の章で、業平の病を聞きつけて多くの方々からの見舞いが届く中、伊勢は「優れた歌人は、誰も届かぬ虚無を、身内に抱えておられるのであろうか」と業平の心情を慮りながら、切々と今までの彼の歌への業績を訴えています。業平と伊勢の会話には感涙すらおぼえます。「さてもこの良く晴れた空と、清らかな気を、ひとりゆると愉しみたいものです」と最期を迎えようとしています。幸せな一生だったのではないかと思えました。

原本と小説の伊勢物語を並行しながら読み進めるほどに気がついたことがあります。和歌は圧縮表現とも言われる。原本は、和歌に精通していない自分にとっては短い散文による補足だけでは、余韻は残りますがさらっと読むとそれまでで終わってしまいました。

一方小説は、作者の生き方や価値観を軸とした想像力で構成されているからか、時代背景を踏まえ、今を大切にしながら内面まで掘り下げた主人公たちの生き方が感じ取れる歌物語に仕上がっているように思えました。そのためか、理解しやすく歌そのものを深く味わうことが出来たように思います。

原本を基底に小説を読むことで、当時の人たちが人生における様々な情景をさらっと和

歌に詠み、緩やかなペースで豊かに人生を過せているようで羨ましくもあり、面白く楽しむことができました。

作者の高樹のぶ子は、「伊勢物語 在原業平 恋と誠」の中で「雅とはきらびやかで優雅という狭い概念だけでは足りず、相手を思いやる「哀れ心」がある。「哀れみ」ではなく、相手も自分も、やがて消えていく身だという諦念が潜んでいる。相手と自分の主張の違いを、どちらが正しいかとギンギンすり合わせ、せめぎ合うのではなく、余裕を置いておく。わからないものを、わからないまま残しておく。一方が正しいければ、もう一方は間違っているとするのではなく、もしかしたら両方正しくていずれも間違っているかもしれない。このような考え方は、現代においてはなかなか難しく、近代的な合理主義、科学的な視線で見れば、良い加減で怠慢、事なかれ主義に見えてしまう。けれども、平安の世では、それが可能であった。なぜかと言えば、人間が知り得ないことがたくさんあったから・・・。

この曖昧で割り切れない、分からないものへの謙虚さが、男女のあいだに「雅」を生み出したともいえる」と平安時代の「雅」に拘っています。

現代をどう生きていくか。人間の欲望で自然を破壊し、余剰物や危険物の多くを無駄に排出しながら、我さえ満たされればよしとする傲慢さ。男女の問題だけでなく、物事に対する謙虚さ、人間関係や社会情勢における想像力・感じる力等の欠乏・貧弱さ等々について改めて考えさせられた「小説伊勢物語 業平」でした

◆ 【 MM 】

今月の課題本が小説の形式をとっていることを忘れ、出てくる歌と他の資料の訳とを照らし合わせて読んでいたのでとても疲れた。この歌の後ろには何があるのか、どういう人間関係が広がっているのか確認するように読んでいた。読み進めるうちにこれは小説だったのだと思うと同時にその世界に踏み入ることができた。しかし時々私の価値観では理解できないことにあたると現代と本の世界を行ったり戻ったりするとともに、私は現代の価値観にしばられていると感じた。もっと本の世界に浸ることができたら・・・と感じながら本と私の距離を感じたのはなぜだろう。

花や動物、その時感じたことを限られた文字数で表しその裏に隠された感情をも匂わせる達人、業平。近づいてはいけない立場の人に感じる抑えきれない感情、気持ちには逆らえず踏み越えてしまう場面。言葉でこれだけ読者をドキドキさせる作者。言葉は有限であることは理解してはいるものの、言葉を操る人が変わればこんなに想像力をかきたてるのか、と感心した。業平の手にかかれば通り過ぎる季節がこんなに憂いを帯びるのか。いままで現代語訳などさまざまな資料文献がある中、伊勢物語の新たな世界を描ける高樹のぶ子。言葉は有限であるかもしれないけれど、想像力をかきたてる点においては果てしなく広がる世界につながる。

この作品は新聞連載だったとあとがきを読んで知った。一年かけて連載されたようだ。一冊の小説として書く場合と毎日出す新聞連載の体では書き方が違うのだろうか。現代を舞台にしていれば途中でストーリーを変更することも可能だろうが、過去のを扱うときには年代も

あるし変更を加えることは難しいかもしれない。最後までの流れができていて少しずつ出していく、という感じだったのだろうか。もしこのことについて書いてあるものがあればぜひ読んでみたい。

始めに書いたように私がどっぷり小説の世界に浸れなかったのはなぜなのか考えてみる。普段なら空想の世界に入ることには難しさは感じないが、今回は伊勢物語という学生時代に触れてきた作品に関係しており歌や人物など実在するものがある。今まで実在の人物を主人公に据えた物語は何度となく読んできた。その時と違うことはなにか。私はまだ頭で読んでいるのではないか。自分の価値観で理解しようとして受け入れられないことがあるから距離を感じるのではないかと思った。今月は読書会に参加できなかったのも、みんなの意見が聞けなかったのがとても残念だ。みなさんの感想文を読んで私の違和感を埋めるものがあるか確かめたいと思う。